

変わりゆく遺影の意義とデザイン―絵画、写真、デジタル―

日本宗教学会第七十四回学術大会 於創価大学

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 瓜生 大輔

二〇一五年三月二十九日早朝、一人の女性がこの世を去った。その葬儀会場の一角に、彼女の遺影と十年前に亡くなった夫の遺影が並べられていた。その場は、悲しみに包まれるというよりは、天寿を全うし、最愛の夫の元に「旅立った」故人に対する祝福にあふれていた。今日、葬儀や法事の場面において欠かせない遺影写真だが、「遺影＝故人の肖像写真」として一般化したのは写真技術が普及したここ百年ほどの間の出来事である。

国立歴史民俗博物館の山田慎也氏の研究（山田慎也「亡き人を想う―遺影の誕生―」『異界談義』国立歴史民族博物館編 二〇〇二年七月 角川書店）によると、遺影の前身は絵画であり、肖像写真としての遺影が一般に普及したのは日露戦争の頃、戦地に赴く前の軍人たちの間で撮影が流行した後と考えられる。岩手県遠野市の寺院に保存されている「供養絵額」と呼ばれる絵画には、明治の初期までは故人の戒名とともに「来世での理想の生活」が描かれていたが、徐々に姿を消し、軍人の肖像画に代わられた。また、江戸時代中期から明治後期にかけて歌舞伎役者の訃報を伝えた浮世絵「死絵」には、死に装束を着た「死後の世界に旅立った役者」が描かれていたが、明治期にはすべてプロマイド写真に代わられた。いずれの事例でも、当初のものは肖像を生々しく残す写真とは一線を画していた。多くの庶民が現世の幸福よりも来世への希望を信じていた時代を反映した描写がそこにあつた。しかし、写真技術の普及がその想像力を排除してしまつたのである。

このように死後の世界を創造的に描いた絵画に代わり、故人のアイコンとして不動の地位を築いた遺影写真だが、今日、ふたたび絵画への回帰とも言える事例が報告されている。近年の終活ブームの中、「しわのない顔で」「病気で痩せ細る前の健康だった自分を」「顔を明るく」などといった要望に応じながら職人が描く、遺影画ビジネスの需要が高まっている（毎日新聞二〇一四年二月二日）。そして、コンピュータを駆使した最新の画像処理・描画技術の出現が、遺影の意義とデザインをさらに大きく変革しようとしている。

遺影写真制作で業界シェア二十七%を抑える株式会社アスカネット（広島市）によると、同社が受注して制作する遺影写真のうち、実に九十五%以上が元の写真を加工・修整して作られているという。背景の削除など一般的な加工に加え、三割以上の事例において衣服の「着せ替え」が行われ、中には「白髪にしてほしい」「（病気をする前のように）太らせてほしい」「髭をなくしてほしい」「増毛してほしい」

などといった、修整というよりはもはや描画に近い加工依頼があるという。それぞれの遺族が思い描く「理想の故人」の姿を表す「デジタル遺影画」の制作とも言えよう。同社では二〇一一年から、生前に自分や家族の遺影写真を選択して保管するウェブサービス「遺影バンク」を提供している。故人の死後、遺影用の写真を選ばなくてはならない遺族の負担を軽減するとともに、「理想の遺影を自分で選び（撮影し）、後世に残す」という新たな文化を創りだすかもしれない。実際、生前遺影写真撮影サービスも一般化しつつあり、「最愛のペットと一緒に」「自作の絵をバックに」といった個性溢れるものも存在する（読売新聞二〇一四年二月一八日）。

遺影とデジタル技術の融合は、製作工程のデジタル化のみに留まらない。筆者がデザインした Fenestra（読み＝フェネストラ、ラテン語で「窓」という意味。<http://fenestra.jp>）は、蝋燭に火を灯すと専用の円鏡に故人の肖像が浮かび上がり、フォトフレームには故人が健在だった頃のスナップ写真が映し出される「祭壇」である。二〇世紀初頭、写真技術の台頭により一度は失われた人々の理想の人物や世界が描かれた「遺影」。さまざまな先端技術の普及が、その意義や意味、デザインをふたたび変えようとしている。

Eメール：uriu@knd.keio.ac.jp

ウェブサイト：http://daisuke.uriuri.org